

通所介護施設に通所する高齢者の聴性行動と聴力に関する研究

平野春樹、吉岡豊

新潟医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科

【背景・目的】高齢化に伴い、通所介護施設へ通所する高齢難聴者の数も増加してきている（厚生労働省、2016）。しかし通所介護施設に入所する高齢者に対して、摂食・嚥下障害などの身体面のケアは積極的に行われているが、高齢難聴者と施設職員とのコミュニケーションについては問題になることも多い。また実際の通所介護施設現場では、聴力測定機器を用いて効果判定を行うことは難しく、見えない障害である難聴は放置される傾向にある。そのことから、高齢難聴者の行動特性に応じた評価が重要となってくるが、高齢者における聴性行動と聴力レベルとの関係について定量的に測定した報告は少ない。また施設に通所する高齢難聴者の聴力レベルに応じた対応の報告も見当たらない。そこで本研究は、高齢難聴者の聴性行動が聴力レベルとどのような関係にあるのかを目的に検討を行った。

【方法】対象は、通所介護施設（A、B、Cの3施設）を利用している高齢難聴者40例（男性13例、女性27例）であった。年齢は65歳～99歳であった。平均聴力レベルが26dBから89dBであった。脳血管障害の既往歴がある者も対象とした。聞こえの状態については日本聴覚医学会きこえの質問紙を使用し主観的に評価してもらった。また気導聴力検査を実施し、良聴耳の平均聴力レベルを求め、40dB未満群（14例）と41dB以上群（26例）に分類して分析を行った。なお、各施設の等価騒音レベルはA施設が60.9dBA、B施設では64.2dBA、C施設では61.7dBAであった。

【結果】聴力レベル40dBで2群に分けたところ平均年齢は、40dB未満群と比べて41dB以上群は有意に高く、語音明瞭度も40dB未満群は有意に高かった。日本聴覚医学会きこえの質問紙の回答について、自己評価が異なっていたのは「1対1の聞き取り」を除く9項目に有意差が認められた（表1）。次に、回答を聴力別に見たのが表2である。この表から、40dB未満群では「人込みでの会話の聞き取り」や「小声での聞き取り」、「テレビの聞き取り」以外の項目ではバラツキは少なく、ほぼ全ての項目でいつも聞き取りやすい傾向にあった。一方41dB以上群では全ての項目でバラツキが多く、特に「人込みでの会話の聞き取り」や「小声での聞き取り」、「テレビの聞き取り」について、評価点4or5の「聞こえないことが多い」「いつも聞き取れない」でバラツキが多かった。

表1 聴力レベルによる聞こえの違い（平均・有意差）

下位尺度	質問項目	40dB未満 (利用者)	41dB以上 (利用者)	有意差
良条件下の語音	1対1での聞き取り	1.3±0.8	1.9±1.2	n.s.
	外での聞き取り	1.4±0.6	2.5±1.1	***
	職員の会話聞き取り	1.1±0.3	2.3±1.2	***
環境音	車の音	1.4±0.9	2.7±1.3	***
	電子レンジの音	1.2±0.6	2.6±1.5	***
悪条件下の語音	後方からの呼びかけ	1.4±0.7	2.7±1.2	***
	人込みでの会話の聞き取り	2.4±1.2	3.4±1.1	*
	4, 5人での聞き取り	1.5±0.9	2.5±1.3	**
	小声での聞き取り	2.4±1.4	3.7±1.3	**
	テレビの聞き取り	1.6±1.2	3.3±1.3	***

いつも聞かされる 1 聞き取れることが多い 2 半々くらい 3 聞き取れないことが多い 4 いつも聞き取れない 5
 n.s.: 有意差無し, *: p < .05 有意差あり, **: p < .01 有意差あり, ***: p < .001 有意差あり

表2 聴力レベルによる聞こえの違い（評価分け）

聴力レベル 評価 (点)	40dB未満			41dB以上		
	1or2	3	4or5	1or2	3	4or5
1対1での聞き取り	13	0	1	17	7	2
外での聞き取り	13	0	0	11	9	6
職員の会話聞き取り	14	0	0	14	8	4
車の音	12	1	1	13	6	7
電子レンジの音	13	1	0	16	2	8
後方からの呼びかけ	13	1	0	10	9	7
人込みでの会話の聞き取り	8	3	3	7	5	14
4, 5人での聞き取り	12	1	1	13	7	6
小声での聞き取り	7	2	5	4	0	22
テレビの聞き取り	11	1	2	8	6	12

【考察】通所介護施設を利用している難聴高齢者を対象に、聴性行動と聴力レベルについて結果、40dBを境として、「1対1の聞き取り」を除く9項目について有意な差が認められた。この傾向は良条件下の語音聴取だけではなく、環境音や悪条件下の語音聴取で行動特性にも違いが認められた。以上のことから、これらの調査項目で自己評価が低い場合は聴力レベル40dBを超えていると推測できるものと思われる。ただし、鶴岡ら（日本聴覚医学会、1997）はS/N比の悪化は中等度聴覚障害者の語音聴取に影響を及ぼすことを指摘しているが、本研究施設で対象となった施設の等価騒音レベルは60dBA以上と比較的うるさかった。これは通所介護施設の一般的な状況とも考えられるが、等価騒音レベルの高さが聴性行動の評価に影響している可能性もある。今後は暗騒音レベルの低い状況での聴性行動評価も必要となってくるものと思われる。

【結論】本研究の結果、聴力レベル40dBを境として、「1対1の聞き取り」を除く9項目について聴性行動評価が大きく異なる可能性が示唆された。